

---

# 地球戦隊ガイライダーズ

王壘

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

地球戦隊ガイアライダース

### 【コード】

N6672P

### 【作者名】

王蠱

### 【あらすじ】

もし仮面ライダーWが戦隊ヒーローだったら・・・

## (前書き)

「やっちゃまった感」満載、Wの各フォームで戦隊作ってみました。  
正直出来はかなりお粗末です（特に戦闘シーン以降）。  
それでも良いという人だけ、どうか生暖かい目でご覧になってください。

とある休日の公園。親子連れやカップルなど当たり前のような光景の中に在って、

その男の存在は僅か以上の違和感を辺りにまき散らしていた。

灰色のロングコートにサングラス、足元はサンダルで頭には今時テレビのマジック特番でしか

見ないようなシルクハットをかぶり右手には同じくマジシャンが使うような長いステッキまで持っている。違和感、いやもはや『異質』という概念そのものが具現化したような風貌の男に、しかし周囲の人々は全く注意を向けていなかった。

「変な奴、関わらないでおこう」というような意識の問題ではない。男がそこにそうして立っていることにその場の誰も気付けないでいる。

そうしていると男は不意に「にやり」と嫌な感じの笑みを浮かべた。そのままステッキをもクルクルと遊ぶように振り回し

「ふんっ！」

一声、地面に先端を突き立てる。と、その点を中心に光が広がる。

紫色の光は公園を取り囲むように円形に広がっていく。

「!?!?なんだよ、これ!」

事ここに至ってようやく人々は異質な男の存在、およびそれが引き起こした事態を認知したらしい。

だが、もう遅い。

「夜宴の兵よ」  
マスカレイド

静かに、唄うような調子で紡がれたその言葉に円形の光　巨大な魔法陣　が反応する。

「ひっ!」「な、なにコレ・・・」

人々の声と表情がさらに引き攣る。

妖しく光る地面、そこからまるで這い出るように姿を現したのは無

数の人影だった。

奇妙な仮面に黒服という姿のそれはまるで規格化された工業製品のように

全ての個体が完全に同じ姿だった。仮面達は出現した場所から一歩も動かない。

いやそれどころか指先一つまで完全に静止している。鍛え上げられた人間でもまず不可能なその

『完全静止』はむしろ何らかの行動を起こす以上に周囲の人間の恐怖感情を駆り立てた。

男はそんな様子に満足げにうなずくと再びステッキをトン、と今度は軽く地面に突く。

「行きなさい」

その言葉に仮面の集団が一斉に動き出した。その動きは滑らかだが、しかしやはりどこかロボットを想わせるような無機質な印象を与える。

反射的に逃げ出す人々。ある者は子供を抱えて、またある者は恋人の手をつかんで必死の形相で。だが。

「なんで！？なんで出られないのよ！？」

「助けてくれ、ここから出してくれー！」

光の外周に辿りついた者の口から漏れ出したのは絶望の音だった。出られない。

光る地面の外に出ようとするとそこには不可視の壁が存在するらしく、押し寄せる人々の力にもそれはビクともしない。

「無駄ですよ。このデジタルメモリの電子空間結界は完全な異空間内外を完全に分断するまさに最強の防御」

最初の立ち位置から一歩も動かさず男の手の中には、一本のUS Bメモリのような機械が握られている。0と1の細かい数字で『D』と描かれたそのマークを愛おしそうに見つめ、

「さあ、程よく絶望してもらったところでそろそろ回収させてもらいましようかね」

そのセリフがスイッチだったかのように仮面達が一斉に飛びかかった。

目標は当然、結界の端に集まっている人々。

誰かが声を上げた。助けてくれ、と。そんな声を笑って聞いていた男の目の前で

「なっ！」

襲いかかろうとしていた仮面達が突然現れた黒いバイクに跳ね飛ばされた。

余程の勢いで体当たりされたのか、結界の端から数十メートルも吹き飛んだ仮面達は

受け身をとることもなくそのまま地面に激突、一瞬で「バンツ！」と爆発し次々に消滅していく。

その光景に今度は自分が驚愕の表情をするしかない男をよそに跨またがっていた単車を降りた男は結界の一部を指差す。

「ここから逃げる、早く！」

見ると空間の一部が陽炎のようにゆらゆらと揺れ歪んでいる。先ほどのバイクによる体当たりの寸前、

男が結界内に突入する際に破壊した空間が修復されていないのだ。言われた人々は事態が未だ理解できないながらも口々に礼を言い脱

出していく。

最後の一人が抜け出た数秒後、歪みは元通りになり再び空間は閉鎖されたものとなった。

「・・・貴様、何者だ。あろうことかわたくしの完全な結界を打ち破っただけに飽き足らず、大切な“材料”まで逃がすとは・・・」

「材料、だと・・・」

その言葉にバイクの男の視線が鋭くなる。

「いかにも。我々<ミュージアム>の偉大なる力、ガイアメモリを生み出すための“記憶の贄”にえ達を・・・」

許しません、と言うか言わぬかといううちに男は先ほどのUSBメモリを再び握りこむ。

<デジタル！>

そこから発せられた声にバイクの青年が身構える。メモリの男はそれを自身の手の平に押し当てる。

次の瞬間、結界と同じ紫の淡い光がその全身を包み込んだかと思うと男の姿は異形へと変化していた。

キノコのような形をした巨大な頭部。指のない右手と一本指の左手。体の各所からは紫電がほとばしるその姿はまさに“怪人”と呼ぶにふさわしい姿であった。

僅かに焦りの表情を浮かべた青年をあざ笑うかのように無造作に手を振り上げる怪人。

それを合図に先と同じように無数の黒服が結界の地面からわき出すように現れる。

「殺りなさい！」

召喚主の怒声と共に無数の影が青年に飛びかかる。その数は彼が跳ね飛ばした倍ほどだろうか。

青年はそれを見てもしかし動こうとしない。怪人はそれを諦めと捉えた。だが実際は違った。

ガツシャアーン！！バババババスバスバスバス！！！！！！  
何かが砕け散る音。そして続けての鈍い衝突音。

怪人が目にしたのは先ほどのバイクの体当たり攻撃の迫力を何倍かにバージョンアップさせたかのような光景。

巨大な車が。結界を突き破って突入してきて。黒服達を一気に撥ねた。

啞然とするしかない怪人の眼前で車の前方部が割れるように開く。

その中に乗っていたのは5人の男女。颯爽と飛び降りた彼らはバイクの青年に歩み寄る。イタズラが露見した子供のような

バツが悪そうな表情を見せた青年の頬を降りてきたうちの一人が引つ張る。

「ひたいひたい、ひゃひしゃがんだ突然よお」

「何すんだ、じゃないわよこのオバカ！一人で突っ走るなっっていつ

も言ってるじゃない！」

なぜか身をくねらせおかまっばい口調の男の言葉に青年も「悪かったよ・・・」と小声で応える。

残る全員もその言葉に納得したように苦笑して頷く。

「また始末書かしらね、左」

クスクスと笑うように言う女の言葉に苦い顔をしながらも

「分かってるよ。あいつ倒したら10枚でも100枚でも書いてやらあ」

左と呼ばれた青年は怪人に向き直る。6人の視線がぶつかるそこでは想定外の事態の連続に自棄やげになったのか

「貴様ら、何物かは知らんが絶対に許さん！夜宴マスカレイドの兵！」

再三召喚された黒服達に命じ突撃をかけさせる。

そんな普通に考えれば剣呑すぎる状況にも焦った様子を見せない左たち。

その腰にはいつの間にか1つのスロットが付いた奇妙なベルトが、そして手には

先ほど怪人が用いたのと似たデザインのUSBメモリがそれぞれ握られていた。

「いくぜ、みんな！」

『おう！』

左の声に全員が応え、それぞれのメモリの起動スイッチを押す。

<ジョーカー！><ヒート！><トリガー！><サイクロン！><ルナ！><メタル！>

6つの起動音声が鳴り響いた刹那、津波のように押し寄せたマスカレイドに彼らの姿はかき消され、

そしてその全てのマスカレイドは一瞬の間の後爆発し消えた。

「なんだと！！」

本日何度目か分からない驚愕の光景に目を疑う怪人の目に映ったのは6色の光。

爆煙の向こうから現れた輝く6つの影は全体的に細身のシルエット

と赤い目を共通としながら

それぞれの色に鮮やかに輝いている。

それを見た怪人の脳裏に思わず幼い頃の特撮ドラマの記憶が蘇るよ  
うな、威風堂々たるそれはヒーローの姿。

その中の一人、黒いボデイの戦士が拳を握る。

「強き漆黒の切り札 ライダージョーカー！」

「熱き紅蓮の焰ひび ライダーヒート！」

「鋭き蒼の射ち手 ライダートリガー！」

「疾き翠の嵐はやみどり ライダーサイクロン！」

「眩き黄昏の幻影まぼゆ ライダールナ！」

「堅き銀の拳 ライダーメタル！」

「地球戦隊！」

「ガイアライダーズ！」

重なった6つの声と同時にその背後でドーン！と同じく6色の爆発  
が巻き起こった。

「こしゃくな、行け！マスカレイドども！」

「イッー！」

奇妙な声をあげ襲い掛かるマスカレイドにライダーズも拳を上げる。

「ヒートシュート！」 「メタルスタンプ！」

赤いライダーヒートの放った高温火炎を銀色のライダーメタルの持  
つメタルシャフトが吸収、

そのまま地面に突き立てると突然噴出したマグマが

二人を取り囲んでいた数体のマスカレイドを呑み込む。

「ルナトリッカー！」 「トリガーガトリング！」

黄色いライダールナの力で分身した青のライダートリガーが

トリガーマグナムの引き金を引くと無数のエネルギー弾が幾重にも  
分裂しながら

マスカレイドの群れに四方八方から襲い掛かる。

「サイクロンロード!」「おらいくぜえ!」  
「くっ!」

緑のライダーサイクロンが生み出した風の流れに乗り、踊るような軽快な動きで

ライダージョーカーは次々と打撃を怪人に命中させていく。相手も必死にかわそうとするのだが

周囲の気流は全てサイクロンに制御されているらしく身動きが取れない。そして。

「ライダーパンチ!」

「ぶぐあ!!!」

渾身の一撃で大きく吹き飛ばされる怪人。それを見て周りのマスカレイドを倒し終えた

他の4人も集まってくる。全員そろったのを確認し、見せ場とばかりにジョーカーが叫ぶ。

「プリズムビッカー!」

彼の声に呼応するかのように遙か天空から雲を突き抜け降下してきたそれは

剣と楯を一体化させたようなデザインの巨大な物体。

正面から向かって前から右にサイクロン、ヒート、ルナ。

左にジョーカー、メタル、トリガーが肩に担ぐ。

「ガイアメモリセット!」

器物の上から見るとXを描くように配された白いラインの先端に4つ配されたスロットに

ベルトから取り外されたヒート、メタル、ルナ、トリガーのメモリが装填されると、

刃らしき部分の先端が虹色の輝きを放ち始める。

よるめきながらも立ち上がった怪人にその先端を向け

『ビッカーガイアシュート!』

放たれた虹色の光弾は高速で回転しながら怪人の体を貫き、一瞬の

のち大爆発させた。

「よっしやー！」

歡喜の声を上げるジョーカー。

だがその時、怪人の骸に何か突き刺さるのを見逃した者はいなかった。

『BIG』と記されたUSBメモリからは突き刺さった怪人の骸を侵食するように闇が溢れ出し、

遂に全身を覆い隠した刹那小山ほどの大きさに巨大化、闇に亀裂が入ったかと思うと

殻を破り出てくるひな鳥の如く先ほど倒した怪人と相似形の、しかし遙かに巨大サイズの異形が姿を現した。

「フィリップ、エクストリームを！」

『了解、実はもう発進済みさ』

通信機越しの声が終わるか終らぬかという間に

6人の頭上に怪人と比べても遜色無い程の巨大な影がよぎる。

鳥を模した形状をしたライダーズの巨大戦闘機 エクストリーム。

それに飛び乗った6人が見据える先では怪人が手当たり次第にビル群を破壊している。

エクストリームの存在にも気付いていないらしいその眼は血走り、

もはや理性のかけらも感じ取ることはできない。完全に暴走状態だ。

「さっさと片付けるぜ！」

ジョーカーの言葉に全員が頷き、それぞれの操縦席に設置してあるスロットにメモリを挿入する。

『エクスバースト！』

名乗りと同じように重なった声と同時、

エクストリームの頭部から発射された極太の光線が怪人を貫通、爆散させた。

「あー！こんなに書けるかー！」  
絶叫する左の前に置かれたのは山と積まれた紙の束、始末書。基地に帰ってきた途端、  
メカニック班のチーフ フィリップから手渡されたその中身は  
『命令無視の単独行動』から『特殊車両ハードボイルダーの無許可持ちだし及び部分破損』、  
果ては『エクストリームの無茶な操作によるエンジンへの過負荷』まで、  
ありとあらゆる内容で生じた損害の内容が書かれている。  
明らかに嫌がらせとしか思えないようなその内容に顔を歪めながら、彼は必死にペンを走らせ続けた。

「デジタル・ドーナントはやられたか・・・」  
どことも知れぬ闇の中、低く響く声にそれをかけられた女は体の芯から凍りついていくような錯覚を覚えた。

『恐怖』の力を持つこの首領の前にいればある意味当然のことはいえ、

どうしようもない感覚を抑えるのに彼女は必死だった。

「まあよい・・・あのようなものがいつまでも組織にいられては不愉快だから・・・」

そんな彼女の内心を知ってか知らずか、

恐怖の主の声はこのまま延々と響くのでは、と感じられるほど緩慢だった。

## （後書き）

本当は続きものにしようかと考えましたがバトルシーンがあまりに下手で挫折しました。

ちなみに各ライダーの変身者は「Atoz」での各メモリ使用者です。

設定だけで

フィリップ（猛<sup>たけ</sup>き白の牙　ライダーファング）と

スカル（古き灰燼の骸　ライダースカル）というのも考えていたので一応ここに書いて自己満足させていただきます。

最後に、本当にお粗末すぎる文章申し訳ありませんでした！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6672p/>

---

地球戦隊ガイアライダーズ

2010年12月31日05時58分発行